

ロビン・フッドと修道士

- 1 夏の木の緑は輝くばかり
葉は大きく伸びやかに
森を歩けば
鳥のさえずりはなんとも楽し
- 2 鹿が高い丘を下つては
谷間に向かって降りてゆき
緑に茂る木の下で
青葉にとけて姿が消える
- 3 聖靈降臨祭の頃のこと
五月の朝は白々と
高みからさす陽の光
鳥たちは楽しげに歌うたう
- 4 「なんとも陽気な朝ですな
キリスト様の御名にかけて
このわたしより陽気な男など
この国にはおりますまい
- 5 「お頭かしら」さあお楽しみなされ
今日の朝は
- 6 なんとも美しいではありませぬか」
とリトル・ジョンが言いました
ロビン・フッドが応えて言いました
「あることがこの心を苦しめておる
このままではミサにも朝の祈りにも
行く気にはなれぬのだ
- 7 「最後にミサで祈りをささげたのは
もう二週間以上も前のこと
わしは今日 ノッティンガムへ行く
お優しきマリア様のお力を借りて」
- 8 すると粉屋の息子のマッチが言いました
この男に幸運がありますように
「どうか武装した屈強な手下を十二人

共にお連れくださいされませ

十二人の手下なしでは

自ら命を危険にさらされるも同じ」と

9
一手下はあまたあれど

この者ひとりで十分だ
リトル・ジョンをおいて他に
この弓を持たせる者はない」

「どうぞご自身でお持ちなされ
わしにはわしの弓がござる

あの緑の森の中で
一ペニー賭けて勝負いたしましよう〔

「賭けなどせぬぞ」とロビン・フッド
「お前とは決して勝負などせぬわ
それでもどうしてもと言うのであれば
わしは三ペニー賭けようぞ」

こうして一人のヨーマンは

シタの茂みで矢を放ちました
リトル・ジョンが勝ちました
五ノリノダの玉縄でして

3
それで一人は道すがら

激しく諍つたのでした

五 シリング求めるリトル・ジョンに

【答】ロビンはすかさず言いました

言うが早いがロビンはジョンにのしかかり

拳で殴りつけました
ジョンはこれに腹を立て
輝く剣を抜きました

「もうお前など主人ではないわ
このわしを殴るとは
誰か別の者をお連れなされ
わしはもう ご免こうむる」

16

朝になるとロビンはノッティンガムへ
一人で出かけてゆきました

リトル・ジョンは陽気なシャーワッドの森へ
勝手知ったる道を戻ってゆきました

17

ノッティンガムへやつてくると
神妙にもロビンは

神様とお優しきマリア様にお祈りしました
無事シャーワッドへと戻れるよう

18

ロビンは聖メアリ教会へゆきました
そして十字架の前にひざまづきました
教会に居合わせたすべての者が
ロビン・フッドの姿を見ました

19

ロビンの横に白髪の修道士が立っていました
神よ なんということでしょう
修道士には一目でそれが
ロビン・フッドだと分かったのです

20

修道士は一目散に

扉に向かって走りました
ノッティンガムの出口のすべてを
修道士は固く閉めさせました

21

「起きて下さい お代官様
すぐにご用意なさいませ

王様に楯つく悪党を

この町の中で見つけました

22 「この目でしかと見たのです

あの悪党がわたしのミサに
早くご用意なさいませ
あの悪党を逃さぬように

23 「悪党の名はロビン・フッド

リンデンの木の下に知られるその名前
わたしから百ポンド奪ったその男
ゆめゆめ忘れはいたしません」

24 すると代官は起き上がり
急いで支度を整えました

部下のだれもが

代官とともに教会に向かいました

25 教会の扉を激しく押し開けました

大勢の者たちが棒でこじ開けました

「なんたることだ こんなことなら
ジョンを連れてくるのだった」

26 しかしロビンは腰に下げた
諸手であやつる剣をとり

代官とぞろりと集まつたその部下たちに
単身突入したのでした

27 群がる敵に三たび切りこみ
信じ難いとお思いでしようが

多くの者が傷を負いました

この日ロビンが殺したのは十二人

28 代官の頭に振り下ろしたロビンの剣が
真っ二つに折れました

「おのれ 鍛治屋め

神の災い受けるがいい

29 「これで丸腰

ああ 無念

こやつらから逃げようとすれば
きっとわしは殺られるだろう」

30 ロビンは教会の中に駆け戻りました
代官たちは寄つてたかつてロビンを

・
・
・
・
・
・
・

31 知らせを聞いたロビンの手下は

茫然自失 石のように立ち尽くしました
皆が正気を失う中で

リトル・ジョンだけは冷静でした

「いつも通り動けばよい

キリスト様をただ信じよ

豪胆無比なお前たちの不様な姿なぞ

見るも不面目

「お頭はどんな窮地からも

いつも脱してこられたではないか

元気を出せ 嘆くを止めて

わしの言うことを聞け

「お頭はいつもマリア様に祈つておられた

このたびも祈られたはず

だからわしはその恩寵を信じる

お頭がひどい死に方などなさるはずがない

「心配はいらん

嘆くを止めよ

お優しきマリア様のお力をかりて

修道士の始末はわしが引き受けよう

・ ・ ・ ・ ・

「ただし ゆくのはわしら二人
わしが直に会つてくる

・ ・ ・ ・ ・

「緑の葉に覆われた

約束の木をしかと守るのだ

この谷をゆく鹿は

一頭たりとも逃がすでないぞ」

こうしてリトル・ジョンは

マッチだけを伴つて

マッチの叔父の家から

近くの通りを見張つていました

朝になるとジョンは窓のそばに立ち

舞台となるべき通りを見張つ正在と

あの修道士が馬に乗り

小姓を一人連れてやつてくるのが見えました

ジョンがマッチに言いました

「これはしめしめ

あちらからやつてくる修道士
あのつば広の帽子 間違いない」

二人は通りに飛び出しました

礼を尽くして 威厳をもつて

そしていかにも親しげに

修道士に挨拶したのでした

「どこから来られた」とリトル・ジョン

「うわさによると かの極悪の無法者
(とロビンのことをこう呼んで)

昨日召し捕られたそうではござらぬか

「あの悪党め わしらから

二十マークもの金を盗みよつた

もし本当にあの無法者が捕まつたのなら
わしらにとつてもそれは吉報」

「わたしも難にあつたのだ」と修道士

「百ポンドあまりも盗まれた

やつを捕えたのはこのわたし

わたしに感謝するがいい」

「ああ神よ 感謝します」とリトル・ジョン

「わしらもご一緒してはなりませぬか

もしもお伴がかなうのならば

道案内をいたしましょう

「なにせあのロビンには 荒くれ者の手下が

ごまんといふと聞いております

のままこの道を進まれるなら

きっと命を落としましようぞ」

修道士とリトル・ジョンは

道みち話ををしていましたが
突然リトル・ジョンが

修道士の乗った馬の頭をつかみました

修道士の乗った馬の頭をつかみ
信じ難いとお思いでしようが
マッチは小姓に手をかけました
逃げる間もありません

修道士の乗った馬の頭をつかみ
馬から引きずりおろしました
容赦なく引いたので
修道士は頭からまつ逆さまに落ちました
リトル・ジョンは心底腹を立てていたので
剣を高々と振り上げました
修道士は命惜しさに
大声出して懇願しました

51 「貴様が^{おととい}陥れたのは」とリトル・ジョン
「ロビン・フッド わしの^お頭よ
もう一度と王様に
告げ口することは許さぬぞ」

52 ジョンは修道士の頭を打ちました
修道士はもう助かりません
マッチは小姓を殺しました
小姓の口を封じるために

53 二人が死体を埋めたのは
苔もヒースも生えないところ
ジョンとマッチは連れだって
王への手紙を持ってゆきました

54 ジョンは跪きました
「王様に神のご慈悲を
王様にキリスト様のご慈悲を

55 「我らが王に神のご慈悲を」

ジョンは堂々とそう言うと
手紙を王に手渡しました

王は手紙を開きました

56 王はすぐに手紙を読むと 言いました

「今までこの陽気なイングランドで
これほどまでに会ってみたいと思つた

ヨーマンは他にない

57 「して この手紙を持って参つた

修道士はどこにいる」

「おそれながら」とリトル・ジョン
「修道士は道中亡くなりました」

58 王はリトル・ジョンとマッチに

二十ポンドの褒美をくださいました
二人を王に仕えるヨーマンに任じ

使者として戻るよう命じました

59 王はジョンに印章を押した信書を手渡し

代官のもとに届けるよう言いました

傷一つつけずにロビン・フッドを

王のもとに連れてくるよう

60 ジョンは王に辞去とまを告げました

信じ難いとお思いでしようが

こうしてジョンはノッティンガムへと

向かつて出立したのでした

61 ジョンがノッティンガムへやつてくると

町の門はしつかと門かんぬきがかかつていました

ジョンは門番を呼びました

門番はすぐに返事をしました

62 「いかなるわけで

このようにしつかと門かんぬきがかかつておる」

「それはロビン・フッドが

牢獄深く投げ込まれて いるからです

「ジョンとマッチとウイル・スカーレットが

信じ難いとお思いでしようが

我らの仲間を殺し

我らのことも狙っているのです」

63 ジョンは代官を探しました

探す相手はまもなく見つかりました

ジョンは王の印章の包みを開き

代官に手渡しました

64 代官は王の印章を見ると

すぐに帽子を脱いで言いました

「して この手紙を持って参った

修道士はどこにいる」

65 代官はジョンの印章を見ると

「あの方は身勝手なお方」とリトル・ジョン

「信じ難いとお思いでしようが

ウエストミンスターの修道院の長おさである

大修道院長になりました」

66 代官はジョンを勞ねぎらつて

67 最上のワインを出しました

夜になると床に入り

みんな眠りにつきました

68 代官はジョンを勞ねぎらつて

ワインとエールをたらふく飲んで
代官が眠りにつくと

ジョンとマッチは二人して
牢獄へと向かいました

69 ジョンが大声をだして

牢番を起こして言いました

「ロビン・フッドが牢破りだ

やつがここから逃げ出したぞ」

70 ジョンの言葉が終わるか終わらぬかのうちに
牢番は飛びきました

ジョンは隠し持っていた剣を突きつけて牢番を壁ぎわに追いやりました

71 「さあ これでわしが牢番だ

鍵を渡してもらおうか」

ジョンはロビンのもとに寄り

すぐさまロビンを解き放ちました

72 ジョンはロビンに剣を手渡し

自分の身は自分で守りをと言いつけて壁の一番低いところを

飛び越え逃げだしました

73 一番鶏が声をあげ

夜が明けはじめました

代官は殺された牢番を見つけ

召集の鐘を鳴らしました

74 町中に響く大声で叫びました

「ヨーマンだろうが悪党だろうがロビン・フッドを連れ戻した者には

褒美をとらせるぞ

75 「」のままでは

二度と王の御前ごぜんへは参られぬもしそのようなことをいたせば

この身は即刻吊し首」

76 代官はノッティンガム中の

表通りや路地裏を探しました

しかしその頃ロビンはすでに

この上なく安全なシャーウッドの森の中

77 リトル・ジョンが

ロビンに向かつて言いました

「ひどい仕打ちのお札はちゃんといたした

これにお暇ひまいただきたい

78 「ひどい仕打ちのお札はちゃんといたした

信じ難いとお思いでしようが
お頭おがしをこの緑の森に連れ戻した上は
これにてお暇ひまいただきたい」

「それはならん この通り」とロビン・フッド

「断じてならん

今日からお前がわしらの頭かしら

わしも含めた無法者たちの」

「それはなりませぬ この通り」とジョン

「それは決してなりませぬ
わしをお仲間とお思いくださるのなら
それだけで十分にござる」

リトル・ジョンがロビンを救つた

これがうそ偽りなき物語

ロビンの手下たちは皆みな

頭かしらの無事を喜びました

皆みなワインに酔いしれて 心ゆくまで喜びました

緑の葉のその下で

鹿肉のペーストも存分に味わいました

エールによく合う味でした

そのうち王のもとに知らせが届きました

まんまとロビンが逃げうせて

ノッティンガムの代官が

もう二度と王のもとには現れないと

すると王が言いました

怒り心頭のご様子でした

「リトル・ジョンが代官を騙した

こともあろうにこのわしまでも

「リトル・ジョンが我らを騙した

まんまとこのわしの目を欺きおつて

さもなくばノッティンガムの代官は

あやうく縛り首にするとこる

85

「」ともあろうにヨーマンの誉れなどと
この手で褒美までつかわした
しかもその上イングランドの国中に
和平の触れまで出したとは

和平の触れまで出したとは

「和平の触れだと
口にするのも癪にさわるが
このイングランド中で
やつこそ真実優れたヨーマンよ

「やつは主人に忠実で
聖ヨハネにかけてもよいが
我らのだれに対してもよいか
主人ロビンへの愛情をもつておる

「ロビン・フッドはどこにいようと
あのリトル・ジョンとは離れられぬ
もうこの件はおさめようぞ
ただ我らがリトル・ジョンに騙されただけ」

「これでロビンと修道士の話は
本当におしまいです
我らが王なる神様
ロビン・フッドに我らの祝福を

(宮原牧子訳)